

リンパ系フィラリア症の低感染地における、尿ELISAによる集団治療効果のモニタリング

木村 英作¹ 伊藤 誠¹ WEERASOORIYA MIRANI V.² 藤巻 康教³
ISLAM MOHAMMAD Z.¹ 青柳 武法¹ 磯貝 芳徳⁴

愛知医科大学 医学部 寄生虫学¹ ルフナ大学医学部寄生虫学教室²
長崎大学熱帯医学研究所寄生体行動制御³ 日本福祉大学情報社会科学部⁴

WHO主導による2020年までにリンパ系フィラリア症をeliminateする計画は、各流行地において集団治療を軸として進められている。スリランカにおいても、2002年よりジエチルカルバマジンとアルベンダゾールによる集団治療が開始された。我々はスリランカ南部の山岳地帯にあるDeniyayaにおいて、集団治療をはさんだ2002年と2003年に、就学児童を中心に住民の尿中の*Brugia pahangi* に対するIgG4抗体価を測定し、この方法が集団治療効果のモニタリングに使えるかどうか検討したので報告する。

2002年と2003年共に調べられた699人について解析した。2002年に7.9%であった陽性率は、2003年には3.3%と有意に減少していた。2002年に陽性であった55人のうち38人が2003年には陰性になっていた。逆に、2002年に陰性であったもののうち6人が2003年に陽性となった。また、2002年には7才ごろ以降に見られた陽性者が、2003年では9才以降からと、遅れていた。血液ではなく尿を使ったバンクロフト系状虫症の診断法は、侵襲性がほとんどないことから住民に受け入れられやすく、従って住民の協力も得やすい。今回の結果は、就学児童の尿ELISAによる集団検診が集団治療効果のモニタリングに使える可能性を示唆している。

Application of urine based ELISA to monitor the effect of mass-drug administration for lymphatic filariasis control in a low endemic area

EISAKU KIMURA

Dept of Parasitology, Aichi Medical Univ School of Medicine, Aichi, Japan